

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第10回)

雑司ヶ谷に眠る東京音楽学校初代校長

夏目漱石は、鏡子夫人と共に雑司ヶ谷霊園に眠っている。

東京の桜が満開になった日、私は文学好きの友人とJRの大塚駅で待ち合わせをした。都電荒川線に乗るためである。大塚から雑司ヶ谷までは8分足らずだが、チンチン電車はひどく混んでいた。

霊園は広く、静かだった。ここには漱石の敬愛するケーベル博士も眠っている。ケーベルは東京帝大との契約が満期となり、帰国が決まった大正3年7月、漱石を晩餐に招いた。学生たちへの別れの言葉を「朝日新聞」に書いてほしいと頼んだ。『ケーベル先生の告別』は、8月12日の文芸欄に掲載された。ミュンヘンに帰ることを熱望して、横浜のロシア総領事館で船の出帆を待っていた。ケーベルはドイツ系ロシア人であった。しかし、第一次世界大戦の勃発で、帰国は叶わなくなってしまう。大正12年6月14日、狭心症のために他界。遺骸は茶毘にふされ、遺骨は雑司ヶ谷霊園に埋葬された。

中央通りを歩いていると、右側の区画に十字架が見えた。ケーベルの墓は簡素だった。少し先の左側の区画に、漱石家の墓はあった。ファンらしき人たちが、さかんに写真を撮っている。

その日は暖かだったので、もう少し歩きたいと友人に頼むと、彼女は漱石ゆかりの人々の墓を丁寧に案内してくれた。永井荷風、小泉八雲、中村

是公、弟子の森田草平…。小説家にして歌人、大塚楠緒子の墓の前で私たちは長い間、時間を過ごした。私の友人は、大塚楠緒子研究をライフワークにしている。彼女の説では、才色兼備の楠緒子は漱石が密かに恋した理想の女性だったという。だから鏡子夫人はひどく嫉妬した。夫の保治は美学者。大塚家に婿入りした。旧姓、小屋。『吾輩は猫である』の迷亭のモデルとも言われている。

話に夢中になって、私たちは道に迷ってしまった。中央通りに戻って、あてもなく歩いていたとき、思いがけず伊沢修二の墓を見つけた。

伊沢修二(1851~1917)は、明治20年(1887)創立の東京音楽学校の初代校長である。奏楽堂は明治23年5月、彼の校長時代に落成した。

明治5年、学制が改革され、小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」の教科の導入が決定された。とはいえ、まだ教材もなければ教師もいない。そこで、文部官僚だった伊沢修二は音楽教育の調査のためにアメリカに派遣された。

明治12年(1879)、文部省は音楽取調掛を設置した。お雇い教師として、ルーサー・ホワイティング・メーソンを招聘。メーソンは伊沢修二がアメリカで教えを受けた恩人であった。こうして日本初の『小学唱歌集』(全三編)が編纂・出版された。「蝶々」「蛍(の光り)」「あふけば尊とし」は、この『小学唱歌集』の中の曲である。